



あるシェルターのインターネット広告に「大型雑種犬に里親を！」と書かれています。もと野良犬で、1歳のときにシェルターに入所し、10歳になった今も飼い主にめぐり合うのを待っているのです。そのQOL(生活の質)はどんなだったのか。この子を9年間も犬舎で生かしておくのが、果たして、人道的と言えるのでしょうか。

犬は「今を生きる」動物です。その自然な生命力、瞬間を楽しむ生きざま——これこそ、彼らに備わる最上の特質と言うべきでしょう。犬は、過去を振り返ることも、より良い未来を望むこともできません。その瞬間に生きるだけです。何とかして家庭に送って幸せにしてやりたい——シェルター側がそう願っている間に、今の彼らは、来る日も来る日も、囲いの中を往復したり、自らの排泄物にまみれながら生き延びる——果たして、これが慈悲深いと言えるのでしょうか。

(シェルターとかケネルと呼ばれる)保護施設は、実際的にも、設計上も、多数の犬を短期間預かるためのもので、だんだんと長期間収容するには向いていません。とりわけ、「no-kill」をうたう殺さない方針のシェルターでは、より長期にわたって犬を預かることになります。安楽死処置をしないと決めたとしても、犬が将来的に健全な精神状態を保てるか否かを判断する基準はありません。シェルターの犬の情緒安定を保証する最低必要条件は確定していないのが現実です。

そもそも、「no-kill」とは、正確にはどういう意味ですか？ 肉体的苦痛、苦しみ、負傷、病気、攻撃性、深刻な分離不安、強迫神経症、常同症などにもかかわらず、自然に死ぬまですべての動物を生かしておくという意味でしょうか。「里子に出せる」犬は、死ぬか、里親が見つかるまで、無限に生かしておくことですか——たとえば、長期に及ぶシェルター生活にどんな適応の仕方をしよう

とも。「no-kill」とは、「アドプション(養子縁組)に向かない」犬だけを安楽死させることですか？ どれほど厳密な定義があるのでしょうか。どんな行動、また、病気の場合に「リホーミングに向かない」と判定するのですか？

犬の肉体的健康を守り、必要な栄養、きれいな水、清潔な犬舎を提供する以上の責任が私たちに求められるのでしょうか。シェルターの犬は1日に何回散歩が必要なのですか？ スキンシップについてはどうなのか。「体に触る」とか「なでる」ことは必要な日課なのか。オモチャについてはどうですか？ 寝床は？ 個々のシェルターが安楽死処置をとらないと決める前に、明確なQOL基準が示されて然るべきではないでしょうか。

安楽死は論議を呼ぶ問題です——それも、きわめて感情的な。気質的に問題なくリホーミングできる犬を、スペース、時間、資金不足のために安楽死させるのは間違いです。私は、7年間全国のシェルターを訪ね歩いた経験から、その犬にアドプションの望みがある以上、空間、時間不足を理由に殺すことは決して許されないと痛感しました。攻撃的、危険な犬をいつまでも収容しておくシェルターが多過ぎる一方、すぐ近くの別のシェルターでは、空きがないからといって、問題のない犬を何十頭も安楽死させているのが現実です。

それに、大半のシェルターは犬の気性を審査せずに受け入れており、実施しても、入所の際に大急ぎで済ませるケースがほとんどです。フレンドリーで「良い子に見える」犬はフリーパスで、実際に扱う労をとらない場合が多いのです。私の経験では、ケネル環境では、犬を連れ出して、いくつかの簡単な行動テストを実施しない限り、本性を見きわめるのは非常に難しいものです。一見「やさしく」て「フレンドリー」な犬が、実際に扱ってみた場合、嫌なことをさせようとすると、実に

わがままで、攻撃的になることもあります。シェルターは、人間との触れ合いが少ない不自然な生活環境です。従って、表面上アドプションに適していると思える犬がシェルター内に居残り、本来、里親にめぐり合えるはずの子が空間的、時間的不足から安楽死させられたりするのです。

全国のすべてのシェルターにある犬舎で「里親との出会い」を待つ犬1頭1頭に尋ねたい質問が2つあります。それは、安楽死にかかわる2つの最も重要な問題——すなわち、QOLと行動適性——について、表面上同じように見えて、実際はまったく別の質問です。

1. この犬は、今日、行動的に、精神的に、感情的に、昨日よりも良い状態か？
2. この犬は、今日、行動的に、精神的に、感情的に、入所した日よりも良くなっているか？

質問に対する答が2つとも“Yes”でなければ、安楽死させる方が犬のために幸せです。判断は、安楽死について「賛成か反対か」とか、方針、感情、感覚をもとに決めてはいけません。あくまでも、犬にとっての最大利益という観点から決定すべきものです。犬は「今を生きる」動物。彼らに地獄の苦しみを味わせないように気を配るのは我々人間の責任です。もしも、感情や行動の様子が悪化したり、精神衛生が破綻した犬を生かしておくとするれば、それは、人間のわがままです。危険な犬や、一生涯、異常行動に悩まされることになる犬を市民に譲渡するのはフェアではありません。

安楽死は、影響力が強く、心をかき乱す重大問題です。私は、18歳のときから、安楽死にかかわり——その場に立ち会い、体を支えたり、慰めたりして実施を助け——また、決断に悩む人を励ましてきました。18歳の頃に比べて、今の方が、安楽死を理解することも、体験することも、難しいような気がします。それでも、収容された犬が「いつかはご主人に出会えるはず」と期待しつつ惨めな生活を送ることの方が、私には、ずっと衝撃的で、心を乱される重大事です——これが、20年以上、全国の様々なシェルターで働いてきた私の思いに他なりません。

スー・スタンバーグ
ニューヨークにある里親を探すシェルターをもつ非営利団体、ロングアウトバレーアニマルズの設立者および代表。犬の凶暴性に関する専門家で、また「シェルターの犬に関する福祉」の導入者。ペットの飼育放棄や過剰繁殖を未然に防ぐプログラムを作成し、新しい家族との安全なペットとのマッチングやシェルターの動物のメンタルなヘルスを手助けをする。